東海学院大学研究年報　５　（2020）
info:doi/10.24478/00003690

【論文】

母親の持つ幼児への意思決定支援観について

川嶋健太郎[1]　・　蓮見元子[2]
（[1]東海学院大学人間関係学部心理学科　・[2]川村学園女子大学）

要　約

幼少期の子どもに対して母親は様々な意思決定支援を行っている。しかしこれまで我が国においては意思決定支援をする際の母親の持つ想いがどのようなものがあるか検討されてきていない。そこで本研究では 3 歳から 6 歳の幼児を持つ母親を対象に子供の選択・意思決定場面において母親はどのような想いをもっていたかを Web を用いて調査した。この結果，母親の持つ子供への意思決定支援観には「親としての願い」「選択の制限」・「親への従順」・「子供との妥協」・「子供に選ばせる理由」の 5 つの因子があることが示された。また意思決定支援観は自己決定理論に基づく養育行動および母親による幼児の意思決定評価と関連していることが示された。

キーワード：意思決定支援，母親，幼児

はじめに[1]

子供達は毎日様々なことについて意思決定をしている。例えば，今日は何をして遊ぶか，どの洋服を着るか，おやつは何にするか，どの習い事を始めるかなどがある。まだ年齢が小さいときには大人が代わりに選んでいる。例えば幼稚園児は母親が服や靴，下着や靴下を用意してくれていて，着せてもいるだろう。しかし，次第に子供は自分で今日着る服を選んで一人で着るようになるし，もう少し大きくなればどの服を買うか選択する。選択・意思決定の研究は従来，大人が合理性からどのように逸脱するかを検討することが多かったが，近年，選択・意思決定の発達的側面・学習の側面が注目されている(Byrns, 2012; Schlottmann & Wilkening, 2012)。

保護者は赤ん坊に対して何を食べるか，どんな服を着るか聞くことなく，保護者の思う通りに食事を与え，服を着せる。しかし，子どもが言葉を喋りだし，保護者の与える事柄を拒否するようになる頃には少しずつ子どもに選択・意思決定を行わせていく。どのような事柄について選択をさせるのか(意思決定の機会の提供)，選択肢の種類はいくつか(選択肢の提供)，間違った選択をした際にはどのように言い含めるのか(正しい選択をするように誘導)など，さまざまな意思決定への支援を行っていると言えよう。

これまで選択・意思決定の支援については子育てのスタイルや選択機会の提供の効果が検討されてきた。自己決定理論から自律性支援をする子育てが子どもの認知および動機づけに対して効果的だと考えられている。自律性支援（autonomy support）とは相手が自発的で自律的であるように能動的にサポートをすることをいう(Ryan, Deci, Grolnick, & La Guardia, 2006)。具体的には子どもが課題に取り組む際に，課題の目標を説明することや，子どもの気持ちを把握すること，選択肢を提供して子どもに主導権を与えること，子どもをコントロールしないことなどである。一方，統制的な子育ては命令をしたり，親の都合を押し付けて子どもをコントロールすることである。

日本においても保護者の養育行動または養育態度に関する尺度が作成され，子供の動機づけや攻撃性への影響が検討されている。中道・中澤(2003)は親の養育態度尺度を作成し，養育態度を「応答性」と「統制」の 2 次元により測定している。大内・倉住・櫻井(2015)は自己決定理論に基づく養育行動尺度を作成している。この尺度は関係性支援・自律性支援・有能観支援の 3 つの下位尺度からなる。川嶋・蓮見(2018)は大学生の幼少期の親からの意思決定支援の認知が「助言をする」「急がせる」「理由を聞く」「誘導する」「認める」の 5 因子からなることを示した。

それでは保護者は子供への意思決定支援についてどのように思っているのだろうか？子供が何かを選ぶ際に，すべて子供の好きなようにさせることも可能であるがほとんどの保護者はそうはしない。手間と時間のかかる支援を行っている保護者には何らかの想い（支援がどうあ

るべきか，何のために支援をするのか，など）があると言えよう。川嶋・北原・蓮見(2017)は幼稚園児の保護者を対象に家庭における選択場面での保護者による支援について半構造化面接によるインタビューを実施し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)によって意思決定の発達への保護者の支援について質的に検討した。この結果では保護者の支援プロセスには具体的な支援行動と保護者の意思決定支援への想いが含まれていた。具体的な支援行動としては，＜子どもが選べる選択肢を設定＞をし，子供がしばらく選択できずに迷っている場合には＜迷いへの支援＞，親が用意した選択肢や選択すること自体を子どもが拒否した場合には＜拒否への支援＞が行われていた。一方，保護者の意思決定支援への想いとして＜選択のきっかけ＞・＜選択させる理由＞・＜選択機会を与える基準＞があり，この想いの後に具体的な支援行動が続いていた。川嶋(2017)でも幼稚園教諭を対象にインタビューを行い，幼稚園での選択場面において保育者が幼児に対して行う意思決定支援プロセスのなかに支援する保育者の想いが含まれていた。

海外では母親による子供への支援動機の質問紙尺度が検討されている。自己決定理論に基づいて Ryan & Connel (1989) の作成した Self-Regulation Questionnaire をもとに子供を支援する場面・状況にあわせて質問項目が修正されて制作されている。例えば Grolnick (2015)では子供の教育・学校行事に親が関与する際の動機が検討され，3 つの行動（子供の先生に話しかける・学校行事に参加する・子供の宿題を手伝う）に対して 4 つのタイプの動機づけ（外発的：私はしなければならないから・・，取り込み：やらなければ罪悪感を感じるから，同一化：・・・が重要だと思うから，内発的：・・・が楽しいから）の程度が調べられた。同様に Katz, Kaplan, Buzukashvily (2009)では保護者が子供の宿題を手助けする際の動機づけについて測定している。自己決定理論に基づかないものでは，Green, Walker, Hoover-Dempsey, & Sandler(2007)は子供の教育に保護者が関与する際に影響を与える要因として，保護者役割に関する信念が測定している（例えば,「学校でボランティア活動をするのは私の責任だと思う」「大変な宿題について子供に説明するのは私の仕事だ」といった質問項目など)。しかしこれまで我が国では保護者の意思決定支援に対する想いに関する尺度は作成されていない。

目的

以上から，本研究では幼児の保護者が持っている意思決定支援への想い（幼児への意思決定支援観）がどのようなものか因子分析を用いて検討する。またこの意思決定支援観と自己決定論に基づく養育行動尺度および子供の意思決定能力についての評価との関連性についても検討する。

方法

参加者

3 歳から 6 歳（幼稚園・保育園に在籍する年代）の幼児を持つ母親 300 名が調査に参加した。参加者は(株)クロス・マーケティングのアンケート・モニターに登録しており，アンケートに参加すると現金・ギフト券等に交換可能なポイントを獲得することが出来た。

調査時期

2019 年 11 月に実施した。

調査項目の構成

調査項目の構成は以下のとおりである。

①参加者の属性について：参加者の性別，年齢，および幼児の性別，年齢，通っている施設（通っていない・幼稚園・保育園・こども園・小学校)，年齢クラス（未就園児･年少／3 歳児･年中／4 歳児･年長／5 歳児クラス）ついて回答を求めた。

②幼児への意思決定支援観項目(50 項目 5 件法):川嶋･北原・蓮見(2017)での幼稚園児の保護者に対して行った意思決定支援についての M-GTA での分析から生成された 29 の概念のうち，意思決定支援観に関する概念 9 について，概念ごとに質問項目を作成した(表 1)。質問項目の作成にあたっては，インタビューの中での保護者の発話をもとに具体的なセリフを含めた。発達心理学を専門とする大学教員によって項目を検討した結果,【やる気と責任を持たせるための選択】については【やる気を持たせるための選択】【責任を持たせるための選択】の 2 つに分けて最終的に 10 概念について概念ごとに 5 項目ずつ，合計 50 項目を作成した。評定に際しては，調査参加者に自分の子供一名を思い浮かべ，子供が何かを選んだり決めたりするときにどのような思いを持っているか，各項目について,「1：まったくあてはまらない」から「5：よくあてはまる」までで評定させた。

表 1　項目作成時に参考にした川嶋・北原・蓮見(2017)での意思決定支援観に関わる概念

概念	定義
1 拒否されるので選択させる	保護者の提案が拒否されるので，それならば選択をさせること
2 言葉が出てきたので選択させる	言葉に出して意思を示せるようになったので選択をさせること
3 機嫌をよくするための選択	子供に好きなものを選ばせることで，子供の機嫌をよくすること
4 やる気と責任を持たせるための選択	選択させることで，子供にやる気と自分の選択に責任を持たせること
5 成長のための選択	選択をさせることで子供の認識能力や自立心の向上を願うこと
6 危険か否か	子供の危険などにかかわる場合には，子供には選択させずに大人が管理する
7 時間・将来	時間や遠い将来に関することは子供では選択できないので，親が管理する
8 高価か否か	高いお金がかかるものは保護者が決める
9 親の方針	保護者の子育て方針により，子供には選択させないものがある

②養育行動尺度(12 項目 4 件法)：大内他(2015)が自己決定理論に基づいて作成した保護者向けの養育行動尺度である。下位尺度として関係性支援・自律性支援・有能感支援があり，それぞれ 4 項目から構成されていた。

③母親による幼児の意思決定評価（10 項目 5 件法）：川嶋・蓮見・北原(2017)が作成した自分の子どもの意思決定についての保護者による評価尺度であり，自分で決める・人任せ・こだわる，の 3 つの下位尺度がある。同じ年齢の他の子どもと比較して「1. まったくあてはまらない」，から「5. よくあてはまる」までの 5 段階で 10 項目について回答を求めた。

この他に意思決定支援行動についての 95 項目に回答を求めた。

手続き

調査会社（クロス・マーケティング(株)）に調査委託し，3 歳から 6 歳の幼児を持つ保護者に対して調査依頼が行われた。Web を利用した調査のために，各質問はそれぞれ Web ページ上に表示された。参加者の属性については 1 問毎にページが遷移し，調査対象者外（例えば小学生の保護者）の回答者は後の回答から除外された。回答は PC またはスマートフォンによって行われ，それぞれマウスまたは指で回答欄をクリックすることで行われた。参加者の属性以外の評定尺度についてはそれぞれ大問としてすべての項目が表形式で表示され，マウスポインタの移動や回答欄へのクリックに伴って，回答と質問項目が赤く強調表示された。大問毎に回答終了ボタンがあり次の大問へと遷移した。ただしクリック回答漏れがあった場合には未回答部分を回答しない限り回答終了とならなかった。

倫理上の配慮

本研究は東海学院大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会(ID: 2019-11)より承認を受けて実施した。

結果

幼児の意思決定支援観 50 項目について平均値及び標準偏差を検討したところ偏りが見られなかったので，最尤法による探索的因子分析を行った。初期の固有値の変化は 7.49，3.95，1.96，1.81，1.61，1.49，1.31，1.17，1.11，1.11，1.03，0.97…であった。並行分析の結果からは 7 要因，VSS 基準では 2 または 3 因子，MAP 分析では 5 因子が示唆された。それぞれの因子数を仮定して因子分析を試みたが，因子の解釈可能性から 5 因子が妥当と判断した。そこで 5 因子を仮定して最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が 0.35 以下の項目および複数の因子に高い因子負荷量を持つ項目，合計 7 項目を分析から除外し、再度最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。同様の基準でさらに 5 項目を分析から除外し，さらに最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 2 に示す。なお、回転前の 5 因子で 38 項目の全分散を説明する割合は 40.8%であった。

第 1 因子は 9 項目で構成されており，「子供が自分で選ぶと，子供に自然と「やらなきゃ」という気持ちを持たせることができる」「子供に責任感を持ってほしいので，子供自身に選ばせている」といった項目に高い付加量があることから，「親としての願い」因子と命名した。第 2 因子は 12 項目で構成されており，「親として子供の好きに決めさせられない領域がある」「お金のかかる高価なものの選択は，子供に任せられない」といった項目に高い

付加量があることから，「選択の制限」因子と命名した。第 3 因子は 6 項目で構成されており，「子供が嫌がったとしても，親が選んだものならば従わせるべき」「親が選んだことに子供は素直に従うので，無理に子供に選ばせてはいない」といった項目に高い付加量があることから，「親への従順」因子と命名した。第 4 因子は 6 項目で構成されており，「子供に選ばせるのは，そうしないと機嫌が悪くなるからだ」「子供の選択に親が口出しすると，子供の機嫌が悪くなるので口出ししたくない」といった項目に高い付加量があることから，「子供との妥協」因子と命名した。第 5 因子は 5 項目で構成されており，「子供が自分自身で選ばない限り，子供は成長しない」「子供は自分で選ぶことで，成長すると思う」といった項目に高い付加量があることから，「子供に選ばせる理由」因子と命名した。

内的整合性を検討するα係数を算出したところ，「親としての願い」で 0.84，「選択の制限」で 0.81，「親への従順」で 0.78，「子供との妥協」で 0.73，「子供に選ばせる理由」で 0.77 という値であった。

次に各因子を構成する項目の平均得点を算出し下位尺度得点とした(表 3)。意思決定支援観尺度と養育行動尺度の尺度得点間の相関係数を計算したところ，「親としての願い」得点は養育行動尺度のすべての下位尺度と弱～中程度の有意な正の相関(.323～.560)が見られた。「選択の制限」得点は有能感支援得点とのみ弱い正の相関が見られた。「親への従順」得点はすべての下位尺度と弱い有意な負の相関(-.225～-.308)が見られた。「子供との妥協」得点は相関が見られなかった。「子供に選ばせる理由」得点は養育行動尺度のすべての下位尺度と弱～中程度の有意な正の相関(.374～.573)が見られた。

意思決定支援観尺度と保護者による幼児の意思決定評価の尺度得点間の相関係数を計算したところ，「親としての願い」と「子供に選ばせる理由」得点は「自分で決める」得点と有意な弱い正の相関(.374，.277)がみられた。また同様に「親への従順」得点と「人任せ」得点(.260)，「子供との妥協」得点と「こだわる」得点(.345)の間に有意な弱い正の相関がみられた。

考察

本論文では Web 調査によって 3 歳から 6 歳の幼児を持つ母親がどのような意思決定支援観を持っているか調べた。本調査の結果，母親の持つ意思決定支援観には「親としての願い」「選択の制限」・「親への従順」・「子供との妥協」・「子供に選ばせる理由」の 5 つの因子があることが示唆された(表 2)。

それぞれの因子は川嶋・北原・蓮見(2017)での複数の概念を含んでいる。「親としての願い」因子の項目は，【責任を持たせるための選択】，【やる気を持たせるための選択】・【成長のための選択】などから作られた項目であった。同様に「選択の制限」因子は【親の方針】・【高価か否か】・【危険か否か】・【時間・将来】の項目であった。「親への従順」因子は【拒否されるので選択させる】・【言葉が出てきたので選択させる】・【親の方針】・【やる気を持たせるための選択】などの項目であった。「子供との妥協」因子は【機嫌をよくするための選択】・【拒否されるので選択させる】・【やる気を持たせるための選択】などの項目であった。「子供に選ばせる理由」因子は【成長のための選択】・【危険か否か】【親の方針】などの項目であった。同じ因子に含まれているそれぞれの項目はインタビューでは異なる文脈のなかで語られていたが，質問項目として文脈から外れると項目の文言から類似点があったのかと考えられる。

本調査から意思決定支援観の一部分は自己決定理論での養育行動と関連性があったと言える。意思決定支援観の「親としての願い」「子供に選択させる理由」得点が高いほど，養育行動尺度のすべて，特に自律性支援得点が高くなる傾向がみられた。反対に「親への従順」得点が高いほど養育行動尺度得点はすべて低くなる傾向が見られた。このことは保護者が意思決定支援をする際に「親としての願い」（やる気を出して欲しい・責任感を持って欲しい）「子供に選択させる理由」（自分で選ぶことで成長して欲しいなど）を持っている場合，また「親への従順」を求めていない場合に，自己決定を促す養育行動を行う可能性があると言えよう。

また意思決定支援観には自己決定を促す養育行動と関連が少ない観点もあったと言える。「子供との妥協」は養育行動尺度と相関（-.019～.129）がほとんどなかった。自己決定理論で想定される関係性支援・有能観支援・自律性支援（また反対という意味で統制も）という子供へのポジティブな支援とは異なった，日常の中での仕方ない母親の想いの一面（子供の機嫌を取るために選ばせるなど）を今回の意思決定支援観で切り取ることが出来たと言えるだろう。

表 2　幼児の意思決定支援観　因子分析結果

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	共通性
親としての願い（α=0.84）						
子供が自分で選ぶと，子供に自然と「やらなきゃ」という気持ちを持たせることができる	0.711	-0.044	-0.008	0.075	-0.027	0.522
子供に責任感を持ってほしいので，子供自身に選ばせている	0.669	-0.024	-0.103	-0.064	0.043	0.523
子供に自分で選ばせているのは，子供にやる気を出して欲しいからだ	0.658	0.009	0.001	0.129	-0.015	0.486
子供のやる気を引き出すために，子供に選ばせている	0.647	0.124	-0.058	0.123	0.011	0.539
子供に選ばせるのは，選んだことに責任を持たせるためだ	0.646	0.026	0.162	-0.205	0.108	0.396
自分で決められる子にしたいので，子供に選ばせている	0.583	0.005	-0.205	0.01	0.091	0.546
教育方針として，子供が選ぶことが出来ること，親が選んで用意することを決めている	0.473	0.1	0.19	-0.076	-0.107	0.183
将来の重大な選択で失敗しないように，小さい時から選択できるようにしている	0.455	-0.097	0.184	-0.032	0.264	0.322
子供はもう自分の意思を伝えられるので，子供に選ばせている	0.351	0.085	-0.239	0.199	0.18	0.453
選択の制限（α=0.81）						
親として子供の好きに決めさせられない領域がある	0.081	0.691	-0.084	-0.202	0.061	0.49
お金のかかる高価なものの選択は，子供に任せられない	-0.084	0.588	0.038	-0.025	0.105	0.354
健康とかケガに関することは，子供ではなく親が決めることである	0.243	0.587	-0.077	-0.258	0.022	0.431
危険の可能性がある場合，子供には選ばせない	0.092	0.575	-0.113	-0.118	0.03	0.337
予定に関することは，子供ではなく親が決めることである	-0.016	0.566	0.05	0.062	0.088	0.35
将来に係わることは，子供にはまだ決めさせられない	0.023	0.562	0.25	0.02	-0.113	0.485
高額なものは親がお金を出すので，子供の意見よりも親の意見が大事だ	0.107	0.491	0.216	-0.058	-0.144	0.37
言葉もしゃべれない小さい頃は，親が子供の全部を決めていた	-0.086	0.485	0.15	0.066	0.143	0.304
子供は先の見通しが出来ないので，時間に係わることは選ばせられない	-0.018	0.457	0.197	0.235	-0.185	0.44
値段の安いものならば子供が選んで失敗してもよい	-0.034	0.407	-0.262	0.248	0.05	0.249
高価なものでも子供のものならば，子供が自分で選ぶべきだ	0.255	-0.361	0.048	0.204	0.1	0.267
子供が選んでよいのは，無料かもしくはとても安いものを選ぶ場合だ。	-0.07	0.353	0.311	0.234	-0.084	0.408
親への従順（α=0.78）						
子供が嫌がったとしても，親が選んだものならば従わせるべき	0.197	-0.06	0.718	0.062	-0.108	0.516
親が選んだことに子供は素直に従うので，無理に子供に選ばせてはいない	0.079	-0.05	0.69	0.013	0.032	0.419
子供が言葉を話せるようになっても，親が子供のことを全部決めている	0.038	-0.123	0.687	0.182	-0.045	0.526
食事の内容など，親としての方針があるものについては子供に選ぶ機会は与えない	0.102	0.157	0.629	0.021	0.035	0.43
子供に自分で決めさせても，子供に責任感は生まれない	-0.202	0.082	0.473	0.181	0.084	0.359
子供が自分で選んだとしても，子供のやる気が高まるわけではない	-0.147	0.135	0.469	-0.018	0.162	0.269
子供との妥協（α=0.73）						
子供に選ばせるのは，そうしないと機嫌が悪くなるからだ	-0.043	0.007	0.105	0.712	-0.115	0.529
子供の選択に親が口出しすると，子供の機嫌が悪くなるので口出ししたくない	-0.008	-0.122	0.056	0.638	0.056	0.429
親が選んだものを子供が嫌がるので，子供自身に選ばせている	0.025	-0.085	0.125	0.594	0.046	0.4
子供は自分で選べないと，子供のやる気がなくなる	0.329	-0.1	0.067	0.45	-0.001	0.384
子供は自分が選んだものなら，機嫌よくやる	0.318	0.152	-0.29	0.39	-0.133	0.374
親が決めた場合，失敗したら子供は親のせいにしてしまう	-0.041	0.001	0.098	0.38	0.077	0.17
子供に選ばせる理由（α=0.77）						
子供が自分自身で選ばない限り，子供は成長しない	0.062	0.047	0.141	-0.024	0.743	0.525
子供は自分で選ぶことで，成長すると思う	0.086	0.255	-0.08	-0.063	0.711	0.668
子供が少々危なくても，子供が自分で選んで行動するべき	0.042	0.011	0.121	0.054	0.59	0.346
親の方針があったとしても，結局は子供に選んでもらっている	-0.028	0.015	-0.142	0.098	0.496	0.331
子供が楽しい気持ちで出来るように，子供が選べるようにしている	0.22	0.023	-0.101	0.007	0.416	0.379
因子間相関	Ⅱ	0.071	-0.342	0.275	0.523	
	Ⅲ		0.242	0.109	-0.021	
	Ⅳ			0.166	-0.42	
	Ⅴ				0.195	

表 3　幼児への意思決定支援観・養育行動・幼児の意思決定評価間の相関係数および平均値と *SD*

	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	*M*	*SD*
幼児への意思決定支援観												
Ⅰ　親としての願い	.036	-.217 ***	.323 ***	.560 ***	.360 ***	.560 ***	.323 ***	.374 ***	-.136 *	.198 **	3.43	0.56
Ⅱ　選択の制限	−	.318 ***	.072	.013	.076	-.126 *	.232 ***	-.028	-.008	.023	3.48	0.55
Ⅲ　親への従順		−	.220 ***	-.254 ***	-.305 ***	-.308 ***	-.225 ***	-.115 *	.260 ***	.106	2.63	0.66
Ⅳ　子供との妥協			−	.207 ***	-.019	.129 *	-.014	.125 *	.121	.345 ***	2.96	0.63
Ⅴ　子供に選ばせる理由				−	.416 ***	.573 ***	.374 ***	.277 ***	-.128 *	.060	3.68	0.60
養育行動尺度												
Ⅵ　関係性支援					−	.605 ***	.732 ***	.278 ***	-.154 **	.036	3.42	0.51
Ⅶ　自律性支援						−	.569 ***	.344 ***	-.130 *	.109	3.14	0.46
Ⅷ　有能感支援							−	.247 ***	-.108	.017	3.29	0.48
幼児の意思決定評価												
Ⅸ　自分で決める								−	-.149 *	.429 ***	3.29	0.69
Ⅹ　人任せ									−	-.031	2.30	0.89
Ⅺ　こだわる										−	2.94	0.77

意思決定支援観と幼児の意思決定評価の各下位尺度には関連性がみられた。幼児の意思決定評価の「自分で決める」は意思決定支援観の「親としての願い」「子供に選ばせる理由」と弱い相関が見られた。これは責任感ややる気，成長を願う母親ほど子供は自分で決めることが出来ると評価していると言える。また同様に「人任せ」は「親への従順」と，「こだわる」は「子供との妥協」と弱い相関が見られた。母親が子供は自分に従うべきと思うほど子供は人任せであると評価し，子供のこだわりに妥協する母親ほど子供がこだわっていると評価しているといえる。ただし今回の調査は 1 時点での回答であるため，母親の意思決定支援観と子供への意思決定評価のどちらが原因であり，結果であるか評価することは出来ない。時間を空けて 2 時点での回答を得ることが出来れば両者の因果関係を評価することが出来るだろう。

本研究の課題として，第 1 に子供への意思決定支援観の因子数を再検討する必要がある。本論文では 5 因子を採用した。しかし意思決定支援観尺度得点間の相関を見ると，表 3 から「親としての願い」と「子供に選ばせる理由」得点は相関が比較的高く他の因子との関連も類似していた。「親への従順」「子供との妥協」得点の高い母親ほど「親としての願い」「子供に選ばせる理由」得点が低くなる傾向がみられた。また「親としての願い」と「子供に選ばせる理由」得点は養育行動尺度および幼児の意思決定評価の各下位尺度とも同様の相関係数であった。また表 2 より「親としての願い」と「子供に選ばせる理由」の項目内容も類似する部分がある。

第 2 に意思決定支援観尺度の妥当性を検証する必要がある。これまで幼児への意思決定支援観に関する尺度が作成されていないため，併存的妥当性を検証できない。項目の内容的妥当性を高めるとともに，両親に対して調査を同時に行い，お互いの意思決定支援観（自身についての評価とパートナーによる自身への評価）がどの程度一致するか検討しておく必要がある。

注

1．本研究は平成 30 年度科学研究費補助金基盤研究(c) 課題番号 18K02500 の一環として実施された。

引用文献

Byrns, J. P. (2012). The development of self-regulated decision making, In Jacobs, J. E. & Klaczynski, P. A. The Development of Judgement and Decision Making in Children and Adolescents, pp. 5-38.

Green, C. & Walker, J. & Hoover-Dempsey, K. & Sandler, H. (2007). Parents' Motivations for Involvement in Children's Education: An Empirical Test of a Theoretical Model of Parental Involvement. Journal of Educational Psychology. 99. 532-544.

Grolnick, W.S. (2015). Mothers' motivation for involvement in their children's schooling: Mechanisms and outcomes. Motivation and Emotion, 39, 63-72.

Katz, I. & Kaplan, A. & Buzukashvili, T. (2011). The role of parents' motivation in students' autonomous motivation for doing homework. Learning and Individual Differences. 21. 376-386.

川嶋健太郎 (2017). 子どもの意思決定に対する幼稚園教諭の支援プロセスに関する質的研究 保育学研究, 55, 18-28.

川嶋健太郎・北原靖子・蓮見元子 (2017). 保護者による子どもの意思決定支援プロセスの質的分析, 日本発達心理学会第 28 回大会（於 広島大学）

川嶋健太郎・蓮見元子・北原靖子(2017). 幼児の意思決定への母親による支援行動 (2) 幼児の意思決定に対する評価が母親の意思決定支援行動へ与える影響, 日本心理学会第 81 回大会（於 久留米大学）

川嶋健太郎・蓮見元子 (2018). 大学生の幼少期の親からの意思決定支援の認知と自己決定感 東海学院大学研究年報, 4, 45-52.

中道圭人・中澤潤(2003). 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部紀要, 51, 173-179.

大内晶子・倉住友恵・櫻井茂男(2015). 自己決定理論に基づく養育行動尺度作成の試み, 日本心理学会第 79 回大会（於 名古屋大学）

Ryan, R. M., & Connell, J. P. (1989). Perceived locus of causality and internalization: Examining reasons for acting in two domains. Journal of Personality and Social Psychology, 57, 749-761.

Ryan, R. M., Deci, E. L., Grolnick, W. S., & La Guardia, J. G. (2006). The significance of autonomy and autonomy support in psychological development and psychopathology. In D. Cicchetti & D. J. Cohen (Eds.), Developmental psychopathology (2nd ed., Vol. 1). Hoboken, NJ: Wiley

Schlottmann, A. & Wilkening, F. (2012). Judgement and decision making in young children, Dhami, M. K. Schlotmann, A. & Waldmann, M. R. (Eds) Judgment and Decision Making as a Skill, pp. 55-83.

Mothers' view of decision support for children in early childhood

KAWASHIMA Kentaro [1], HASUMI Motoko [2]

[1]Tokai Gakuin University and [2]Kawamuragakuen Woman's University

Abstract

Mothers provide a variety of decision support to young children. However, in Japan, it has not been examined what kind of feelings a mother has when supporting decision-making for young children. In this study, we investigated the feelings of mothers in the decision-making scene of children using mothers who have children aged 3 to 6 years. As a result, the mother's view of decision-making support for children includes five factors: "Wish as a parent", "Limitation of selection", "Submissiveness to parents", "Compromise with children", and "Reason for choosing children" Moreover, it was shown that the decision support view is related to the child-rearing behavior based on the self-determination theory and the decision-making evaluation of the child by the mother.

Keywords: decision support, mother, child